



TITLE:

<大會抄録>世界金本位制と中國の銀貨經濟

AUTHOR(S):

中村, 哲夫

CITATION:

中村, 哲夫. <大會抄録>世界金本位制と中國の銀貨經濟. 東洋史研究
1993, 52(3): 521-522

ISSUE DATE:

1993-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154448>

RIGHT:

『纂圖方論詠訣集成』と比較した結果、原典は李嗣(希范)著『集解詠訣』一二巻であろうというのが發表者の現在の見解である。

リッダ(イスラームからの離脱) 考

後 藤 明

六三二年、アラビアのメディナで、唯一神(アッラー)への信仰と服従を説いていたムハンマドが死去した。私見によれば、ムハンマドは「神の使徒」という資格で、自分の政治的判斷や戰爭の指揮に従うように人々に求めていた。彼は同時に自分は「預言者」でもあると自覺していたのであるが、「預言者」とは人々に「従うこと」を求める立場とは考えていなかったと思われる。いずれにせよ彼は、アラビアのほぼ全領域で、自分の權威を確立した。しかし、ムハンマドにとっての「眞の信徒」とは、『コーラン』の文言によれば、「神の道に移住し、神の道で戦う」人々だけであつた。そして、そのような「眞の信徒」は、メディナだけにいたのである。

ムハンマドの死後、「眞の信徒」たちは彼らだけで「神の使徒の後継者(カリフ)」を選出して、ムハンマドなきあともメディナが一つの社會でありつづけることを外部に示した。ムハンマドが「神の使徒」であり「預言者」であることを認め、彼や彼の代理人に「サダカ」を支拂っていた外部のさまざまな集團は、彼の後継者には「サダカ」の支拂を拒否した。新たに「カリフ」を「長」にいただいたメディナ社會は、そのことを「イスラームからの離脱(リッダ)」

ととらえ、そのような集團と戦つた。

メディナ社會との戦いに際し、メディナ外部のさまざまな集團はより大きな集團にまとまろうとした。そのとき、いくつかの場合には、人々は「預言者」を指導者とした。後世のムスリムの歴史敘述は、そのような「預言者」を「嘘つき」とよんでいる。

以上のことは、この分野を研究している研究者にとっては自明のことである。本發表では、限られた資料のなかの指導者の立場・資格を表現している用語に注意を拂つて、その資料を再吟味する。結論は、自明の事實の再確認である。

世界金本位制と中國の銀貨經濟

中 村 哲 夫

經濟史學の範疇から歐米と中國との相剋を論ずると、世界金本位制との關係に還元できる。兩者の關係を圖式化すると、つぎの三つの時期に區分される。第一ラウンドでは、中國は「強者」の地位をえ、A・スミスをして「世界で最も富める國」と言わしめる。この時代に、新大陸の銀生産の霸者であるスペインが没落、ヨーロッパでは金との交換における銀貨の低落、中國からの金の流出という特徴的な事態が進行する。第二ラウンドは、イギリスが産業革命の成功を背景に金本位制度を掲げ、イングランド銀行の世界銀行化へと向かう。その間、中國では國內での銀價格の高騰という世界經濟循環とは逆の方向が加速する。しかし、中國はまだ「對抗者」の位置

にある。ドイツが一八七〇年に金本位制を確立、それを機に金本位制度と中央銀行制度が世界市場システムの中核となる。この第三ラウンドへの移行に伴い、中國では民間ギルドが秤量貨幣としての銀貨を獨占するシステムの變革が迫られる。辛亥革命による山西幫の没落は、その結果である。しかし、孫文の指向する金本位制度は、いくつかの阻害要因のため挫折する。そして、三〇年代の世界恐慌が中國農村を全面的に襲い、銀貨經濟を國內で支えた銅錢經濟が終焉を迎える。

兩宋交替期における辛氏について

小岩井 弘 光

『宋史』列傳一七七卷中には數多の人物が立傳されるが、既に錢大昕・趙翼等によって指摘される如く、不備の點が認められ、立傳せられて然るべき人物が無視される場合も相當數ありうる様である。かかる觀點に立つて兩宋交替期に注目するに、軍事面で相當な關りをもちながら一人も立傳されなかつた辛氏一族が見出されるのである。諸書に散見される記事によるに、當時の辛氏には辛叔詹・叔獻、次世代の興宗・昌宗・企宗・道宗・永宗・彥宗等が武將として見出される。彼らは果して立傳に値しない人物であらうか、もし價值ありとすれば何故に立傳されなかつたのであらうか。

例えば辛興宗は方臘を生擒したとされ、その後に重賞の命をうけ雲中（大同）の粘罕（完顏宗翰）のもとに副使として往來する。辛

企宗は御營使司都統制として高宗の身邊にあつて明州遷幸に扈從する。これらは兩宋交替期に相當な活躍をしたものの一つとみて支障あるまい。しかし結局は『宋史』に立傳されなかつたのである。この際、辛興宗の場合でいえば重賞との關りが注目される。兩者のつながり方が辛興宗に幸ともなり、不運ともなり、立傳されるか否かにも影響を與えたかに思われるからである。

そこで改めて辛氏一族の個々人の足跡を尋ねることとし、辛氏が武將として如何なる經歷をもち、如何なる人間關係をもつかを明らかにしたい。具體的にその經歷が立傳に値するものか否か、注目すべき人間關係が見出され、それらが立傳せしめぬ問題を含んでいたかといった點まで言及出来れば幸と思う。

梁の徐勉の「誠子書」

吉川 忠 夫

梁の徐勉（『梁書』卷二五、『南史』卷六〇、四六六—五三五）が息子の松に與えた「誠子書」は、六世紀江南の一顯官の家政の一端をうかがうに足る興味深い内容の文章である。それによると、徐勉は都の清明門の屋敷内に、慧日と十住の愛稱をもつて呼ばれる息子たちの結婚にそなえてあらたに「兒孫の二宅」を營むにあたり、ひとまず十住の「南還の資」を用いることとした。「南還の資」とは、南方恐らくは嶺南の地方官づとめをおえても帰つた資産であらうと思われる。しかしそれだけではまかないきれぬため、二十年